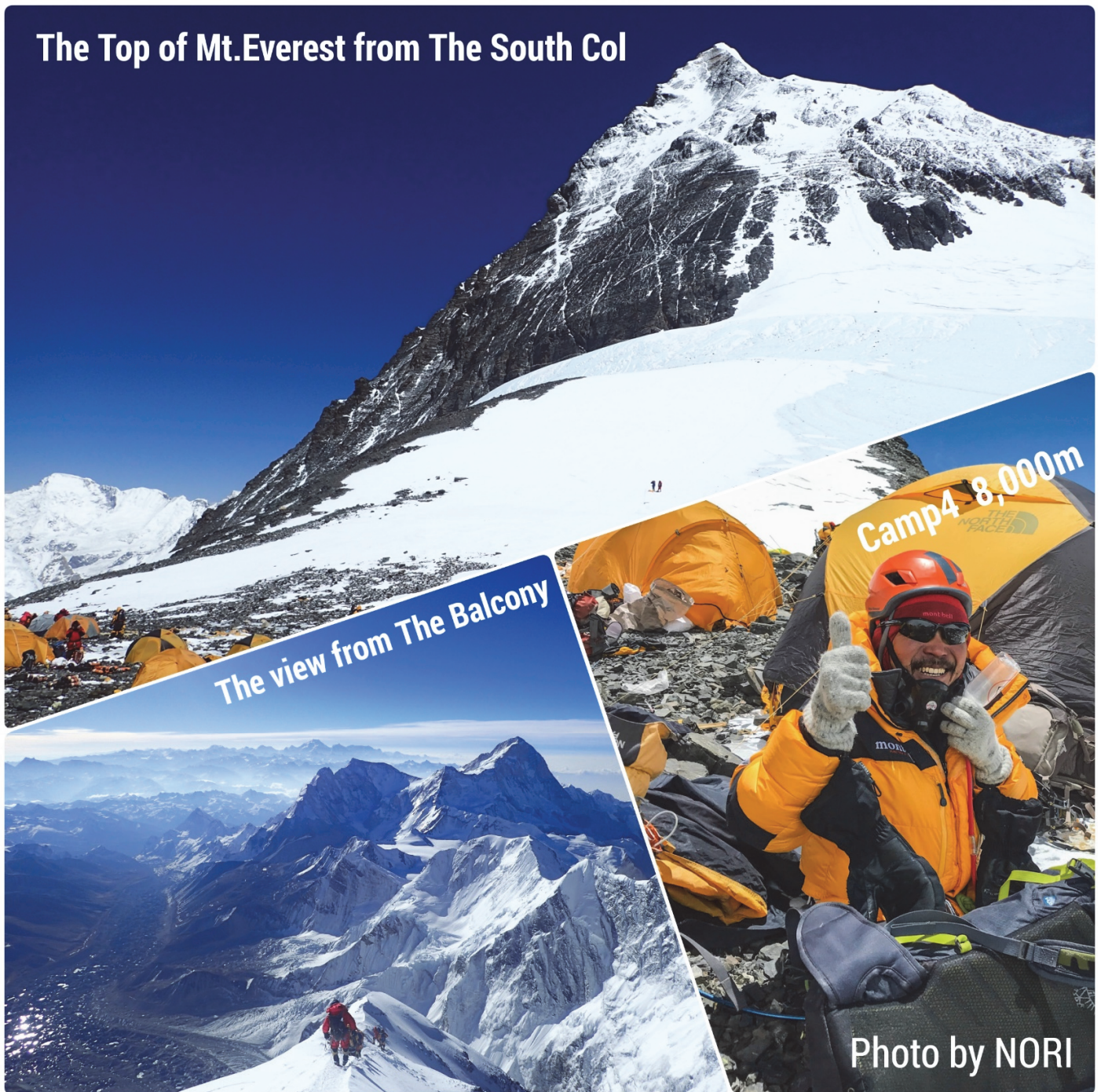


Mt. EVEREST

2019/4/1 - 5/31

石川 教之

The Top of Mt. Everest from The South Col



エベレスト(8848m)を目指したきっかけは、2015年アコンカグアでの国際山岳ガイド Tendi Sherpa との出会いでした。その時彼は9回もエベレスト登頂しており（現在14回）、経験も然る事乍ら人柄も素敵で、この出会いが初めて私にエベレストを意識させました。その後毎年夏前にエベレストのニュースを見ては気持ちを掻き立てられ、仕事等何かしら理由をつけては諦めていました。しかし2018年夏、自身の体力、Tendiの年齢等を考え一念発起、エベレスト挑戦を決意しました。

半年程の準備期間を経て2019年4月1日 Nepalへ出発。下見で訪れた11月の気候と異なり雨雪の頻度が高く、急な大雨で足止めされる時もあれば、目覚めると一面の銀世界なんて日もありました。高所順応と技術確認のためロブチェピーク(6119m)にも登りましたが、ロブチェ B.C.(4800m)にて今回最初で最後の高山病になりました。症状は食欲不振と軽い頭痛。その後は順応が上手く行き、7000m以降酸素ボンベは背負いでしたが8000m以上でも酸素流量2L/min前後で登れており、また食欲が落ちる事も皆無でした。しかし順応のため何度もB.Cからキャンプ3の間を行ったり来たり。B.Cでさえ体が重く、トイレで踏ん張るにも息切れする状態で、1か月半B.C.以上での滞在には体に大きな負担がかかりました。1日に何度もゴォーという激しい雪崩の音を聞いては不安を掻き立てられ、クンブ氷瀑は通る度に形もルートも変わる始末。そんな中悪天候等で停滞を余儀無くされると更に様々なストレスを溜めて…。終盤は早くこの登山が終わってくれと考える自分もありました。しかし、澄み渡る青空から向かってくる眩しい太陽が照らす、天を突き刺すような鋭い峻岳、どこまでも続く雪で覆われた真っ白な山肌、迫りくる豪快かつ優美に青く輝く氷河の波。これをアイゼンがしっかり噛み締める度に身体が地からエネルギーを吸上げたかの様に鼓舞されました。

キャンプ4(サウスコル 8000m)では天気予報に反して強風で停滞を余儀無くされ、ボンベも限られており一日で風が止まなければ下山になる状況でした。幸い翌5月21日昼頃風は弱まり、18:10サウスコルを出発。経験した事のない極寒で、心臓の位置より高くジュマールを持てば直ぐにその手は悴み、時折吹く強風で舞い上がる雪が針のようにサングラスの隙間から肌を刺してきました。月明りとヘッドランに照らされた岩と硬い氷雪で切り立ったナイフリッジを激しく息を切らせながら、一步、また一步とひたすら頂を目指しました。

5月22日 AM02:30 登頂成功。星明りによって薄っすら見えた山岳は、正に勝色に染まっていました。何故かとても落ち着いた気持ちで15分程滞在し、一路キャンプ4へ。そこで3時間程休憩後、そのままキャンプ2へ向かいました。到着したのは17:00頃。調子は頗る良く、チームでも一早く降りて来れ、キャンプ2で待っていた仲間の温かい出迎えを受けました。更に翌日B.C.でも仲間達の熱い抱擁や握手があったのは言うまでもありません。

家族や仲間の温かい応援、いつもノリサーン！と声を掛けてくれる温かいスタッフ、そんな中だったからこそ私の夢の一つは叶える事が出来ました。いつかこんなにも優しいネパールと日本の仲間を繋ぐ架け橋になりたい、そう心に刻みエベレスト遠征を完結しました。皆の、また皆の家族の幸せと健康を願って。本当にありがとう。(石川教之記)